

教育臨床の意味

村田 義幸

はじめに

社会の変化に主体的に対応し、心豊かで、創造的に生きる資質の育成をめざす現行学習指導要領の趣旨を実現するために、学校のなかで子どもたちが自分の課題を見付け、主体的に考えたり、判断したり、表現したりして解決するような学習指導を積極的に展開することで、子どもたちの個性を伸長し、自ら学ぶ意欲を高めようと努力がなされている。学校週5日制やチーム・ティーチングの導入とともに、教師に求められる実践的指導力はますます高度化しているといえる。

他方、いじめや登校拒否、無気力など学校生活における適応困難の問題、自然体験や生活体験の不足など、こどもの成長・発達過程のなかに心配な問題が生じている。これらに適切に対応できる教師の養成も必要となっている。

今年度より、教育学部附属教育実践指導研究センターに教育臨床の部門が新設されたのを機会に、教育臨床について考えてみることにする。

1 「教育」と「臨床」

(1) 「教育」について

教育基本法の第1条には「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値を尊び、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」と記されている。教育は、人格の陶冶を目指す営みであり、一人ひとりの子どもたちが個性化と社会化の統合を図りながら成長・発達するのを援助する営みである。

一人ひとりの子どもの成長・発達過程は、個人によってさまざまである。劇的なほど急激な変化を示し、高い能力を発揮する子どももいれば、成長・発達が停滞しているかのように思える子どももいる。もし、この成長・発達過程に究極の到達点とかゴールがあり、「あるべき姿（完態； complete state）」に到達するまで指導・援助するのが教育であるとする、子どもたちに随分と苛酷な要求をすることになる。むしろ、個人が、他者とのかわりの中で自分なりの生き方を発見し、「今、ここでの」生活を、自己実現に向けて生き生きと送るのを援助するのが教育の役割であると考えられる。教育は、あらゆる場で、いろいろな機会に、さまざまな人と人との関係のなかでなされる。家庭における父親、母親、きょうだい、祖父母などとの関係、地域社会における近隣の住民、マスメディアや書物を媒介とした遠い人々との交流もある。しかし、児童期や青年期にある子どもたちにとって最も重要な教育の場は学校である。学校や学級で生活を共にする教師や仲間との関係は一人ひとりの子どもにとって大きな意味をもっている。

(2)「臨床」について

臨床ということばは、医学の診療にあたる人々から始まったことばであり、文字通り「病床に臨む」ことである。しかし、心理学には「臨床心理学」という分野があり、基本的には、個人のパーソナリティないし適応上の困難を扱う一領域として理解されている。19世紀末に Witmer, L. がペンシルヴェニア大学に開設した心理学クリニックがはじまりである。個人または集団の心理的活動や環境への適応に関連するさまざまな困難の解決を手助けするのに、心理学の知識や技法を用いて活動することを心理臨床 (psychological clinic) と呼んでいる。ベットの横でなされる仕事でなくても、病める人や悩める人の心理的な問題となっている行動の原因について考え、心を癒す営みが心理臨床である。

心理的な問題の原因を明らかにする診断の過程では、観察や面接、心理テストの利用などがなされ、治療の過程ではカウンセリングその他の心理療法が用いられている。最近では、心理的な問題への対処だけでなく、心理的な問題の発生を予防する活動とかメンタル・ヘルスの増進を図るための積極的な活動も展開されている。

2 教育臨床の意義

エリクソン (Erikson, E. H., 1950) の漸成説に従えば、人間の成長は、その人にとって重要な人々との関係、生まれ育った社会・時代との関係に大きく影響される。そのような影響を受けながら、重要な他者との交流のなかで信頼感、自律性、自発性、勤勉性、自我同一性といった各発達段階における心理・社会的危機を乗り越えていく。各時期の発達課題を一つひとつクリアしながら成長・発達の階段を昇っていく。このようなパーソナリティの形成過程における課題に加えて、家庭や学校、社会から解決することが期待される課題の達成をも子どもたちは求められる。この課題達成の過程でつまづきを体験し、壁にぶつかったとき、自分自身の力で問題を解決できる場合もあるが、時には、自力での解決が不可能となり、適応上の困難に落ちいったとき、子どもの周囲に適切な援助や指導を与えてくれる人物が存在することで、深刻な心理的な問題に至らないですむとか、たとえ、心理的な問題を発生させたとしても早期に解決でき、子どもの心が癒されることは大切なことである。

児童期や思春期にある児童・生徒にとって学校やそこで行われる学校教育はとても重要な意味をもっている。

現在の学校教育は、①一定の年齢に達してから開始され、②基本的な生活の場所や労働の場所から明確に区別された場所に位置し、③教師と児童・生徒によって構成され両者が教育的愛情と信頼関係で結ばれる集団生活と、④原則として、同一年齢の児童・生徒同士の活動力を主としている共同生活を通して、⑤学習指導要領に基づき、意図的、計画的、系統的、科学的に組織された教育計画によって継続的に行われる教育活動である。集団で教育を受けることで社会的促進現象や社会的学習が可能となり、教科学習が促進されることが期待される。また、集団生活をする中で、他者と交流して集団に所属したいという要求が満たされ、共生関係 (相互援助) のなかで他者のために貢献できる自分を自覚し、自尊心を高めることができる。集団生活を円滑に行う努力を通して社会的ルールの学習やソーシャル・スキルの学習も促進される。児童期や思春期における集団教育や集団生活は、児童生徒の知識や技術の習得、人間形成を促進する機能をもっているのである。

しかし、他方で集団教育や集団生活は、児童・生徒に大きな心理的負担を作り出してしまうこともある。高学歴社会のなかで、全人教育の掛け声とは裏腹に知育が偏重され、受験競争のなかで、学業成績という単一の価値基準だけで子どもたちが序列化される。限られた時間の中で多くの内容を学習するために、みんなと同一の歩調で理解することができず、結果的に落ちこぼれてしまうなど教科の学習に関わる問題とともに、仲間とは異なる特徴をもっているといっていじめられ、集団から排除されてしまうこともある。子どもたちの学校生活のなかに、極端な競争原理や力による支配、画一化への圧力が蔓延していて所属の要求や自尊の要求などで欲求不満や葛藤状態に陥り、強い不安や緊張状態にある児童・生徒も少なくない。生き生きと建設的に生きようと思いつつも、反社会的な行動や非社会的な行動をとらざるを得なくなっているのである。このような児童・生徒の心理的な問題の解決を支援し、心の痛手を癒していくことが必要となる。

上記のような治療的な営みとともに、全ての児童・生徒を対象とした開発的な働きかけも教育臨床の課題の一つとして忘れてはならない。しかし、このテーマは教育臨床というよりも教育という営み全体に関わる問題である。

3 教育臨床の対象

教育臨床の目的は、児童・生徒の個性の伸長をはかりながら社会的な資質や能力・態度を形成し、さらに将来において社会的に自己実現できるような資質・態度を形成していくことにある。知能や情緒の発達に問題をもつ児童・生徒に対して、問題解決や治療・指導をめざす治療的援助だけでなく、親や教師が、何ら問題ないと考えた児童・生徒の自己実現や創造的な生き方への援助（開発的援助）も含まれる。つまり、全ての児童・生徒が教育臨床の対象なのである。

児童・生徒等の心身ともに健全な発達を考える場合、家庭や学校、地域社会における人間関係や事象への働きかけが重要となる。家庭においては、親や家族に対して望ましいあり方とか、子どもと適切な関わりがもてるように援助する必要がある。また、学校では、児童・生徒の学習指導や生徒指導を効果的に行うために研鑽を深めている教師の求めに応じて援助したり、共同で問題解決にあたることが大切である。個々の児童・生徒の教育に直接的あるいは間接的に関わりをもつ全ての人々が対象となる。その中で特に重要な対象は、家庭教育及び学校教育の中心的担い手である父親、母親と教師である。

4 教育臨床の担い手

(1) スクール・カウンセラー

いじめ、登校拒否、非行など学校教育に関連した問題が多くなるにつれ学校臨床心理士とかスクール・カウンセラーへの期待が高まってきている。石隈（1995）は、日本のスクール・カウンセラーの実践を整理する体系としての学校心理学（school psychology）を「生徒の学習面、心理面（感じる・考える・行動する）、社会面（友人・教師・家族との人間関係）、進路面における発達と発達上の問題に対する、心理教育的援助サービスの体系でありそれを支える学問体系である。援助サービスには、すべての生徒を対象とするものから重大な援助ニーズをもつ特定の生徒を対象とするものまでが含ま

れる」と定義している。そして、学校心理学の内容として(1)生徒の発達や発達上の問題に関する心理的基盤、(2)生徒、教師、保護者、学校組織に対する心理教育的援助サービス、(3)学校教育を三つの柱として挙げ、この学校心理学の実践を期待されている心理教育的援助サービスの専門家としてスクール・カウンセラーを考えている。教師や養護教員とは異なる立場から児童・生徒に接する専門家が学校に配置されることはきわめて望ましいし、すべての学校に早期に配置が実現できることを希望するが、同時に、教師自身が、スクール・カウンセラーの役割を担える存在になることも必要であると考えられる。

(2) 教師に求められる資質

今、学校で教師に期待されている役割は多岐にわたっている。小学校の教育課程では、各教科の学習指導、道徳指導、特別活動の担当者であるとともに生徒指導の担い手でもある。休憩時間には児童のよき遊び相手であることも求められる。また、中学校の教育課程のなかでは、進路教育やクラブ活動の指導、個別の教育相談活動なども加わってくる。

① 教科の指導者

「どのように教え、学ぶか」は、学校教育の中心課題である。児童・生徒の自己教育力の基礎となる読む・書く・計算する能力の向上、基本的な概念、知識、技能の習得、いろいろな学び方の学習は、その後の主体的な学習活動の基礎となり、学習を内発的に動機づける。また、学校生活の楽しさにも影響する。

学校や学級という集団の中で行われる教育においては、教師が児童・生徒に何らかの内容を、適切な教材を、適切に提示し、指導していく教授過程と、教師の提示した情報を受理し、理解する児童・生徒の側の学習過程の2つの側面がある。教師と児童・生徒が相互に作用し合って展開される授業(教授・学習過程)に影響する教師の側の要因としては、教師自身のもつ専門的な知識や能力、パーソナリティ、経験、児童生徒に対して教師の抱く期待などに加えて、学習内容をどのように組織化し学習者に提示するかに関する教材研究のあり方、最適の授業をつくりあげ、個々の児童生徒の適性を考慮した指導のあり方を考えるための学習指導に関する知識などが挙げられる。

教師としては学校経営のシステムとしての広い意味での教育方法について考えることも必要であることは勿論のことであるが、日々の学級のなかで展開される授業システムを最適なものにすることが重要である。従って、種々の学習指導方法の習得と実践、教育メディアの開発と活用、学級づくり(学級経営)の考え方や技術、教育評価の知識と学習者へのフィードバックの仕方(形成的評価と総合的評価、KRの活用など)、児童・生徒の個性や適性を考慮した個別指導(適性処遇交互作用;ATI)の工夫、確実な理解を促すための問いかけやメタ認知を促す働きかけなど教師が身につけなければならない知識や能力は多い。

② 生徒指導(生活指導)者

生徒指導は「一人ひとりの生徒の個性の伸長をはかりながら社会的な資質や能力・態度を形成し、さらに将来において社会的に自己実現できるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の生徒の自己指導能力の育成をめざすものである」(文部省, 1988)である。自己指導能力

とは、自己受容（自己をありのままに認めること）、自己理解（自己に対する洞察）、自己決定（自分の行動を決断する）などをさしている。自分の生き方を自分自身で決定し、自らを導く能力であるが、選択や決定の基準としての人間的、文化的な価値の裏付けが必要である。人間存在のあり方を考えれば、他人との交流や社会的ルールを視野に入れた自治能力の育成が目的となる。

児童・生徒の自己指導能力の育成を援助する、生徒指導の担当者として教師はどのような資質が必要であろうか。

主体性と社会性を統合させるために、自分の行動を選択し、統制（self control）することを求められるが、児童・生徒のなかには選択基準をまだ学習していないとか（未学習）、誤った基準を学習（誤学習）している者もいる。日常の基本的な生活習慣についても同じことがいえる。この場合、未学習の者に対しては適切な行動基準を学習するよう・援助指導しなければならないし、誤学習している場合にはそれにふさわしい対応が必要となる。

他方、児童・生徒のなかには、未学習や誤学習ではなく、何らかの心理的な問題（欲求不満、葛藤、不安、ストレスなど）のために適切な行動がとれなくなっていたり、意図的に不適切な行動をとる場合もある。この場合には、その児童・生徒の心理を理解し、心理的な問題への対応が必要となる。教師に「カウンセリング・マインド」が求められるのである。

ロジャーズ（Rogers, C. R., 1957）が提唱したクライエント（来談者；client）中心療法におけるカウンセラーとしての6つの必要十分条件のうちで、特に、無条件の肯定的配慮（unconditional positive regard）と共感的理解（empathic understanding）の態度を大切に考えようというのである。神保（1991）は「児童・生徒（クライエント）がことばをはじめとして、その人全体で表現し、伝え、理解してもらいたいと願っている内容、感情、意図を教師（カウンセラー）ができるだけ理解しようと努めながら、児童・生徒（クライエント）の人格的発達を援助しようとすることである」と定義している。教師と児童・生徒の間の気持ちの通じ合った人間関係を大切する姿勢である。

③ 教育臨床の担当者（心理教育的援助サービスの担当者）

石隈（1995）は、力動精神医学の立場から予防的精神保健活動を力説したジェラルドカプラン（Caplan, G., 1970）らを参考にして心理教育的援助サービスを、生徒のニーズに応じて三段階に分けている。

一次的関与・・・すべての生徒が持つ発達上の援助ニーズに対応する心理教育的援助サービスで、予防的サービスと発達促進的（開発的）サービスがある。

二次的関与・・・学習面、心理・社会面、進路面に問題をもちはじめた生徒やこれからもつことが心配される生徒などに対する援助サービスである。問題の重大化を防ぐサービスである。

三次的関与・・・長期欠席やさまざまな障害など個別に特別な配慮と援助を必要とする生徒に対する心理教育的援助サービスである。

学校において教育臨床を担う中心的存在はいうまでもなくスクール・カウンセラーであるが、教師も心理教育的援助資源となる必要がある。学校や学級での児童・生徒の行動観察や心理教育アセスメントの実施など、スクール・カウンセラーと協力して作業をすすめる役割を担っている。

②や③の役割を担う教師に求められる資質はどのようなものであろうか。また、そのような資質を育むために、教員養成を目的とする本学部ではどのようなカリキュラムを組織し、どのような課題を学生に課していけばよいのであろうか。今後、早急に検討されなければならない課題である。

参考文献

- 1 石隈利紀 1995 スクール・カウンセラーと学校心理学 (村山正治・山本和郎 [編] スクールカウンセラー その理論と展望 27-42) ミネルヴァ書房
- 2 Caplan, G., 1970 The theory and practice of mental health consultation. Basic Books.
- 3 小林利宣 (監修) 1986 学校心理学 新しい教師のために 東信堂
- 4 神保信一 1991 生徒指導の課題と展望 (中西伸男・神保信一 [編] 生徒指導・相談の心理と方法 日本文化科学社 167-182.
- 5 高木俊一郎 [編著] 1996 教育臨床序説 総合人間学的アプローチへの挑戦 金子書房
- 6 中山 巖 [編著] 1992 教育相談の心理ハンドブック 北大路書房
- 7 水越敏行 1987 授業研究の方法論 明治図書
- 8 文部省 1988 生活体験や人間関係を豊かなものにする生徒指導 (中学校・高等学校編) 生徒指導資料第20集 大蔵省印刷局
- 9 文部省 1991 小学校における教育相談のすすめ方 (小学生徒指導資料 7) 大蔵省印刷局
- 10 若井邦夫 1977 学習の要因 (東 洋・坂元 昂 [編] 学習心理学 第4章) 新曜社